

島崎藤村集

改
造
社
版

杉浦非水装幀

昭和二年三月四日印刷
昭和二年三月八日發行

現代日本文學全集 第十六篇

著者 島崎春樹

發行者 山本美

東京市麹町區內幸町一丁目參番地

印刷者 杉山愛二

東京市牛込區市谷加賀町一ノ一二

發兌

東京市麹町區內幸町一丁目參番地
幸ビルデイング壹階

改造社

振替 東京 一八四〇五五三〇二番
電話 銀座座 四一八
銀座座 五五三〇二番
銀座座 四一八番

「島崎藤村集」目次

巻頭 寫眞 (照影)

序にかへて (筆蹟)

生ひ立ちの記……………一

千曲川のスケッチ……………三

父を追想して……………九
(地中海の旅)

佛蘭西だより抄……………一〇三

燕のごとく歸る……………一五〇

故國を見るまで……………一九九

故國に歸りて……………一九七

飯倉だより抄……………二二七

春を待ちつゝ……………二五五

子供のため……………三〇四

年譜……………三二一

生ひ立ちの記

(ある婦人に與ふる手紙)

一
私の子供が初めて小学校へ通ふやうに成つた其翌日から、私は斯の手紙を書き始めます。昨日の朝、吾家では子供の爲に赤の御飯を祝ひました。輝く燈火の影に夜更しすることの多い都會の生活の中でも、子供ばかりは夜も早く寝、朝も早く起きますから、弟の方も兄と一緒に早く床を離れました。兄は八歳、弟は六歳に成ります。お人好しの兄に比べると弟はなか／＼きかない氣で、玩具でも何でも同じ物が二つなければ承知しないといふ風です。ところが其朝に限つて、兄の方には新しい靴や、帽子や、其他學校用のものが買つて宛行はれてあるに引かへ、弟のためには子供持の雨傘と、麻裏草履としかありません。弟は地團太踏んで、ぐづり始めました。兄と一緒に朝の膳に對つても、兄が晴々しい顔付で赤の御飯をや

つて居る側で、弟は元氣もなく、不平らしく萎れて、不性無性に箸を執り始めました。そのうちに不圖思ひ附いたやうに、食事中自分の膳を離れて、例の新しい雨傘を取りに立つて行きしました。それを大事さうに自分の膳の側に置いて、それから復た食ひ始めました。家のものが皆な可哀さうに思つて笑ふと、弟は自分の爲たことを嘲り笑はれたかと思つたかして、やがてその雨傘を元の場所へ仕舞に行つて、今度は好きな御馳走も食はずに泣き續けました。學校までは二三町あります。そこへ通ふ子供は馬車や自転車などはげしく通る廣い道路を越して、町を折れ曲つて行くのです。昨日の朝は家のものが一人隨いて、近所の子供や親達と一緒に學校へ行きました。今朝は送りにだけ行つて、試みに獨りで歸らせることにしました。『兄さんけ最早解つたやうな顔をして居ました。獨りで歸つて被入つしやいッて言ひました

ら、うなんて——』

隨いて行つた娘は斯様なことを言つて學校の方に居る子供の略で持切つて居ました。昨日學校の教場であつたものの姿が見えなく成つたと言つて泣いたといふ話などとして笑ひました。

斯の兄の方の子供は、性來弱々しく、幾度か醫者の手を煩はした程で、今日のやうに壯健らしく成らうとは思ひもありませんでした。皆な丹精一つで漸く學校へ通ふまでに漕附けたのです。それを思ふと斯兄は朝晩保護の役目を引受けて呉れた親類の姉さん達や下婢に僞程御禮を言はねば成りません。學校の終る頃には、家のものは皆な言ひ合せたやうに門口に出て、獨りで歸つて来る子供を待受けました。『あ、兄さんが歸つて來に、歸つて來た。』と一人が言ふと、近所の人も往來に出て眺めて、『まるで、靴が歩いて來るやうだ。』と申しました。

學校歸りの子供は靴を肩に掛け、草履袋を手に提げ、新しい帽子の徽章を光らせながら、半ば夢のやうに家の内へ歸返りました。地方に居て絶えず私や私の子供のために心配して居て下さる貴々に、私は斯のことを書き

送りたいと思ひます。貴女が著物を作つて送つて下さつたりした一番年少の女の兒も、今では漁村の乳母の家で、どうにか斯うにか歩行の出来るまでに成長したことを申上げたいと思ひます。

貴女もやがて二人の子の親とか。左様言へば、四五日前に私はめづらしい蜜蜂が斯の町中の軒先へ飛んで來たのを見かけました。あの黒い、背だけ黄色な、大きな蜂の姿を斯ういふ花の少ない場所で見かけるとは實にめづらしいことです。それを見るにつけても、貴女が今住む地方の都會の空氣や、貴女がお母さんの家の方の白壁、石垣、林檎畠や、それから私が自分の少年の時を送つた山の中の日あたりなどを想ひ起させます。人の幼少な頃——貴女は自分の子供等を見て、その爲すさまを眺めて、それらに思ひ比べた時、奈様な感じを起しますか。すくなくも私達の眼前に、それが幼稚な形にもせよ、既に種々難多なことが繰返されて居るでは有りませんか。

私達が子供の時分、相手にするものは多く婦人です。私達は女の手から手へと渡されたのです。それを私は今、貴女に書き送らうと思ひ

立ちました。斯の手紙は主に少年の眼に映じた婦人のことを書かうと思ふのですから。

二

私の側に今居る兄弟の子供が八歳と六歳になることは貴女に申上げました。彼等幼少いものを眼前に見る度に、自分等の少年の時と同じやうなことが矢張この子供等にも起りつゝあるだらうか。丁度自分等も斯様な風であつたらうか。左様思つて私は獨りで微笑むことが有ります。

私が今住む場所は町の中ですから、夕方になると近所の子供が狭い往來に集ります。路次路次の子供まで飛出して來て馳け廻る。時には着屋の亭主が煩がって往來へ水を撒いて歩いても、そんなことでは納まらない程の騒ぎを始め。吾家の子供も一緒に成つて日の暮れるのも知らずに遊び廻ります。夕飯に呼び込まれる頃は、家の内は薄暗い。屋外から入つて來た弟の方は燈火の下に立つて、

『もう晩かい。』

と尋ねるのが癖です。早く夕飯の済んだ黄昏時のことでした。私は

二人の子供を連れて町の方へ歩きに行つたことが有りました。夕空に飛びかふ小さい黒い影を見て、あれは何かと兄の方が尋ねますから、蝙蝠だと教へますと、子供等はめづらしさうに眼を見張りました。瓦斯や電燈の點いた町の空に不恰好な翼をひろげたものの方を眺めて居りました。斯の子供等の眼に映るやうな都會の賑やかな灯——左様いふ類の光輝は私の幼少い頃には全く知らないものでした。夕方と言へば、私は遠い山の彼方に燃えるちら／＼した幽かな不思議な火などを望みました。それは狐火だといふことでした。夜鷹と言つて、夕方から飛出す鴉ほどの大きな醜い鳥が、よく私達の頭の上を飛び廻りました。それが私の子供の時を送つた故郷の方の空でした。

私は自分の少年時代のことを御話する序に、眼前に居る子供等のことも貴女に書き送らうと思ひます。私達が忘れて居て、平素思出したことも無いやうなことで胸に浮はせるのは、この子供等です。遠く過去つた記憶を辿つて見ると、私達の世界は朦朧としたもので、五歳の時には斯ういふことが有つた、六歳の時には彼様いふことが有つた、とは言へないやうな

氣もします。種々な相違した時のことが、雑然一緒に成つて浮び揚つて來ます。そのくせ、極く小さな事で、忘れないで居るやうなことは、それが昨日あつたと言ふよりはつい今日あつたことと、のやうに、明瞭と、しかも微細な點まで、實に活々と感ぜられるのです。

ある日の夕方、私は弟の方の子供の手を引ながら散歩に出掛けました。斯の兒はなかなか理窟屋で、子供のやうな顔付をして居ないといふところから、家に居る姉さん達から「このな」といふ綽名を頂戴して居ます。大人と子供との混血兒といふ意味です。種々な問を起したがる年頃で、それは何處から覺えて來るともなく、『随分滑稽だ』とか、『一體全體、譯は何だい』とか、柄にも無いやうな口眞似をしては皆なを笑はせる。往來を歩いて居ても、直に物が眼につくといふ風です。

『あ、一本脚の人が彼様なところを歩いてら。』と二本の杖に身を支へながら行く人の後姿を見つけて、それを私に指して見せました。電車通りの向側には、よく玩具を買ひに行く店があります。子供はその店の方へ行けと言つて、駄々をこねて聞入れませんから、私も持餘

して、

『買つて、買つてツて……買つてばかり居るぢやないか。そんなに父さんは金銭がありやしないよ。』

漸くのことです子供を言ひ難しませて、それから橋の畔の方へ連れて行きました。そこに煙草と菓子とを賣る小さな店があります。小さな硝子製の箱に鯛などの形した干菓子の入つたのが有りましたから、それを二箱買つて、一つを子供の手握らせると、それで機嫌が直つて、私の行く方へ隨いて來ました。軟かな五月の空氣の中で、しばらく私は町の角に佇立んで、暮れ行く空を眺めて居りました。

『父さん、何してるの——あの電燈を勘定してるの。』

『あゝ。』

『そんなこと、つまらないや。』

子供に引張られて、復た私は歩き廻りました。

『最早御飯だ。早くお家へ歸らう。』

と言つて、吾家近くまで子供を連れて歸りかけた頃、何を斯の兒は思ひついたか、しきりに御飯と御膳の相違を比べ始めました。父のが御

膳で、自分のが御飯だとも言つて見るやうでした。

『御飯と御膳と違ふのかい。』

と私が笑ひますと、子供は可羞しさうに笑つて、

『知らない。』

と言ひ放ちながら、急に家の方へ馳出して行つて了ひました。

恐らく斯の兒の強情なところは私の血から傳はつたものでせう。しかし私は斯の兒ほど泣き易くはありませんでした。丁度弟の方の子供ぐらゐる年頃のことでした。ある晩、私は遊友達の間屋の子息と喧嘩して、遅くなつて家の方へ歸つて行きました。叱られるなどいふことを豫期しながら、果して家の門を入つて四舍風な小障子のほまつた出入口のところまで行くと、私が問屋の子息を泣かせたことは早や家の方へ知れて居りました。やかましい問屋のお婆さんがそれを言附けに振込んで來たといふことでした。で、私は懲らしめの爲に、そのまゝ庭に立たせられました。薄暗い庭から見ると、玄關の方も裏口の方も皆な戸が閉つて、唯小障子の明いたところだけ燈火が射して居る。私

は夏梨の樹の下に獨りで震へながら、家のものが皆な爐邊に集つて食事するのを眺めました。日頃黙つて居る兄の顔などは、私の仕たとに就いて非常に腹でも立てたやうに、餘計に畏しく見えまして。其晩に限つて、誰も救ひに來て呉れるものが有りません。斯の刑罰は子供心にも甘んじて受けなければ成らないやうなものでした。私は皆なの夕飯の終る頃まで、心細く立ち續けました。

斯ういふ時に、私の側へ來て言ひ寄めたり、皆なに御託をして呉れたりしたのは、お牧といふ下婢です。目上の兄達が奥の方へ行つた後で、お牧は私の膳を爐邊へ持つて來て、勤めて呉れましたが、到頭其晩は食ひませんでした。

私の生れた家では、子供に一人づつ下婢を附けて養ふ習慣でして、多くは出入のもの、娘から取りました。私に附いたお牧は髮結の家の娘でした。理髮店といふものは未だ私の故郷には無かつた頃ですから、お牧の父親が髮結の道具——あの引出の幾つも附いた、鬢者油などのにほひのする、古い汚れた箱を提げてよく吾家へ出入したことや、それから彼の穢い髮結が背後に立つて父の腮などをごし／＼とやつた

ことは、未だに私の眼に著いて居ます。お牧の父親と言へば土地でも有名な穢い男でした。その娘に養はれると言つて、よく私は他から調戲はれたものです。でも、お牧は乳を吞ませないといふばかりで、其他のことは殆んど乳母

同様に私を見て呉れました。母や祖母などは別として、先づ私の幼い記憶に上つて來るのは斯の女です。私は斯の女の手に抱かれて、奈様な百姓の娘が歌ふやうな唄を歌つて聞かされたか、そんなことはよく覚えて居りません。お牧は朴葉飯といふものを造

へて、庭にあつた廣い朴の木の下に鹽搦飯を包んで、それを私に呉れたものです。あの氣の出るやうな、甘い搦飯の味は何時までも忘れられません。青い朴葉の香氣も今だに私の鼻の先にあるやうな氣がします。お牧は又、紫蘇の葉の漬けたのを、筍の皮に入れて呉れました。私はその三角に包んだ筍の皮が梅酸の色に染まるのを樂みにして、よく吸ひました。

『姉さん、何か。姉さん何か。』と言つて、私の子供は朝から晩まで娘達に菓子ねだつて居ります。どうかすると兄弟とも白い砂糖などを菓子の代りに分けて貰つて居

ます。それを見て、私は自分の幼少い時分に、黒砂糖の塊を舐めたことを思ひました。

私がお牧の世中に負さつて、暗い夜道を通り、寺の境内まで村芝居を見に行つたことは、彼女らの記憶から離せないものの一つです。顔見世の晩で、長い柄のついた燭臺に照らして見せる異様な人の顔、異様な臺、異様な衣裳、それを私はお牧の世中から眺めました。初めて見た芝居は、私の眼には唯ところ／＼光つて映つて來るやうなものでした。丁度、眞間なところに動く不思議な人形でも見るやうに。

これほど親しいお牧では有りましたが、しかし彼女の顔の切れた指の皮の裂けたやうな手を食事の時に見るほど、可厭はしいものも有りませんでした。お牧の指が茶碗の縁に觸ると、もう私は食へませんでした。子供の潔癖は、特に私には酷しかつたのです。お牧ばかりでは有りません。『私の直ぐ上は銀さんといふ兄貴で、この銀さんが洗手盥を使つた後では私は面も洗へませんでした。銀さんは又、わき／＼私を嫌がらせようとして、面白半分に盥の中へ唾を吐いて見せたりなどしたものでした。私の生れた家には太助といふ年をとつた家

僕も居りました。この正直な、働くことの好きな、獨身者の老爺は、まるで自分の子か孫のやうに私を思つて呉れました。恐らく太助が私を愛して居たことは、お牧の比では無かつたでせう。不思議にも、それほど思つて呉れた老爺と、朝晩抱いたり負つたりして呉れたお牧と、何方を今でも思出すかといふに、矢張私はお牧の方に言ひ難いなつかしみを感じます。でも私は太助が好きでした。塙邊は廣くて、いつも老爺の坐る場所は上り端の方と定つて居りましたが、そこへ軟かい藁を小屋から運んで來まして、夜廻くまで私の穿く草履などを手造りにして呉れたのも、この太助です。それから大きな百姓らしい手で薪を縛る繩などをごし／＼と縛ひながら、種々なお伽話や、猪の化けて來た話や、畠の野菜を材料にした謎などを造つて、私に聞かせるのを樂みにしたのも、この太助です。それを聞いて居るうちに私は眠くなつて、老爺の側で寝て了ふことも有りました。

太助の働く小屋は裏の竹藪の前にありました。可成廣い屋敷の内でしたから、そこまで行くには私は梨、林檎などの植ゑである畠の間を通り、味噌蔵の前を過ぎ、お牧がよく水汲に行

く大きな井戸について石段を降りますと、その下の方に暗い米蔵が有りまして、それに續いて松蔭だの松葉の焚附だのを積重ねた、屋が有りしました。太助は裏山の方から獨りで左様いふものを運んで來るのです。その小屋の内で、一日薪を割る音をさせて居ることも有りしました。小屋に面して古い池が有りしました。棚の上の葡萄の葉は青く淀んだ水に映つて居りました。石垣のところには雪下などがあの目ばたきするやうな白い小さな花を見せて居りました。そこ

は一方の裏木戸へ續いて、その外に稻荷が祭つてあります。栗の樹が立つて居ます。栗の花が枝から垂下る時分には、銀さんが他の大きな子供と一緒にあの枝から栗蟲を捕つて來たものですが、それを踏み潰すと、緑色の血が流れます。栗蟲の身から、銀さん達は強い絲の材料を取つて、魚を釣る道具に造りました。その原料を酢に浸して、小屋の前で細長い絲に引延して乾すところを、私はよく立つて見て居りました。栗の味が又大きく口を開く頃になりまして、毎朝私達は裏の方へ馳附けて行つたものです。そして風に落された栗を拾はうとして、樹の下を探し廻つたものです。それを人の知らない中に

集めて置いて、小屋の前で私に焼いて呉れたり、母屋の爐邊の方まで見せに持つて來て呉れたりの太助でした。

何かにつけて私はイヂの汚ないやうなことから覚えて居ります。けれども、ずつと年をとつた人と同じやうに、少年の私にはそれが一番楽しい欲でした。斯様なことを私は最初の貴女に御話するからと言つて、それを不作法とも感ぜません。種々な幼少い記憶がそれに繋がつて浮び揚つて來ることは、争へないのですから。序に、太助が小屋から里芋の子を母屋の方へ運んで行きますと、お牧がそれに蕎麥粉を混ぜて、爐の大鍋で煮て、あの婢の切れた手で芋が餅といふものに造へて呉れたことも書いて置きます。芋焼餅は、私の故郷では、楽しい晩秋の朝の食物の一つです。私は冷たい大根おろしを附けて、焼きたての熱い蕎麥餅を皆なと一緒に爐邊で食ふのが樂みでした。口をふ／＼言はせて食つて居るうちに、その中から白い芋の子が出て居る時などは、殊に嬉しく思ひました。

三

昨日、一昨日はこの町にある極神社の祭禮

で、近年にない賑ひでした。町々には山車、踊屋臺などが造られ、手古舞まで出るといふ噂のあつた程で、鼻の先の金色に光る獅子の後へは同じ模様の衣裳を着けた人達が幾十人となく随ひて手に手に扇を動かし乍ら、初夏の日のあつた中を揃つて通りました。それ獅子が来た、御輿が来たと言つて、子供等は提灯の下つた家の門を出たり入つたりしました。

『御事で、どんなに嬉しいのか知れませんが』と姉さん達は斯の子供等のことを言ひました。が、兄の方は肩に掛けた襷の鈴を鳴らして歸つて来て、後鉢巻などにして貫ひ、黄色い團扇を額のところ差して、復た町の方へ飛び出して行くといふ風でした。提灯に蠟燭の火が映る頃から、二人とも足袋跳足にまで成つて、萬燈を振つて騒ぎ廻りました。

私も祭らしい日を送りました。町に響く太鼓、昇がれて通る伏天王、屋臺の上の馬鹿囃、野蠻な感じのする舞——すべて、子供の世の方へ私の心を連れて行くやうな物ばかりでした。

毎年のやうに私は出して着る袴が二枚あります。母の手縫にしたもので、形見として残つ

て居るのは最早それだけです。私は十五年の餘も大切に保存して居ります。それが又、私の持つて居る著物の中で、一番著心地の好い著物なのです。短い給時に、私はそれを取り出すのを樂みにして居りますが、それを著た時は妙に安心して居られるやうな氣もします。その中一枚はあまり見苦しく成つたと言はれて、今年からは寝衣にして著ることにしました。

私の母は斯うした手織綿をよく丹精したものです。私が子供の時分に著た著物は大概母の織つたものでした。私の生れた家は舊本陣と言つて、街道筋にあつて、ずつと昔は大名などを泊めたのですから、玄關も廣く、その一段上に板の間がありました。そこから廣い部屋部屋に續いて居ました。その板の間の片隅に機が置いてありました。私が表の方から古い大きな門を入つて玄關前の庭に遊んで居りますと、母が障子の影に腰掛けて錯々とした音をさせたものでした。

頬の紅い、左の眼の上に黒子のあつた母のことを言へば、白い髪を切下げて居た祖母のことも御話しなければ成りません。祖母は相應に名のある家から嫁いで来た人で、年はとつても未

だシツカリして居りました。尤も私の覺えてからは腰は最早すこし曲つて居りましたが、一體、私は七人の姉弟のうちで、一番の末の弟で、私の直ぐ上が銀さん、それから上に二人姉があつたさうですが、斯の人達は幼少くて亡くなりましたさうです。その上に兄が二人あつて、一人は母の生家の方へ養子に參りました。一番年長が姉です。姉は私がまだ極く幼少い時に嫁に行きましたから、殆んど吾家に居たことは覺えません。長兄の結婚は漸く私が物心づく頃でした。嫂を迎へてから、爐邊は一層賑かで、食事の度に集つて見ると可成り大きな家族でした。その頃から私は祖母に隨ひて、每晚隠居所の方へ泊りに行くやうに成りました。そこは井戸に近い二階建の離れ家で、階下は物置やら味噌蔵やらに成つて居りました。暗いところを行くのですから、私は祖母と一緒に提灯つけて通ひました。

私の家では、生活に要する物は大概は手造りにしました。野菜を貯へ、果實を貯へることなどは、殆んど年中行事のやうに成つて居ました。母は若い嫂を相手にして、木梨の汁などで縁をよく染めました。茶も家で造りました。茶摘

といへば日頃出入の家の婆さんまで頼まれて来て、若葉をホイロに掛けて採む時には男も一緒に手傳ひました。玄關前の庭の横手には古い椿の樹がありましたが、その實から油を絞りました。私は母や、嫂の織つた着物を著、太助の造つた草履を穿いて、少年の時を送つたのです。

例のお牧に連れられて、映し繪を見に行つた晩のことでした。旅の見世物師が来て、安達が原だの、鍋島の猫騷動などを映して見せ、それでいくらかの木戸錢を取りました。障子に映つた鬼婆、振上げた出刃庖丁、後ろ手にくし上げたられた娘、それから老女に化けた怪しい猫の幻影などは、夢のやうな恐怖を誘ひました。家へ戻つて行つても、私は安心しませんでした。

『祖母様、お前さまは眞實の祖母様かなし……一寸背後を向いて見させれ……』

『これ、何を馬鹿言ふぞや。』

母や、嫂は側に居て笑ひました。その頃から私は「人浚ひ」に浚はれて行くといふ恐怖なども感じて、祖母と二人ぎり寂しい隠居所の方へ行く時には、寢床の中に小さくなつて寝たこともありました。お化より何より「人浚ひ」が私

には一番恐しかつた。それは夜鷹の鳴く日暮方にも通るもので、一度浚はれたら、両親の許へ歸つて來ることが出来ないやうにも思はれました。

すこし見慣れないものがあると、私は子供心に眼をとめて見ました。そして不思議な恐怖に襲はれることが有りました。太助がよく働いて居た木小屋の前を通り抜けて、一方の裏木戸の外へ出ますと、そこには稻荷が祭つてあります。葉の尖つた椿、暗い杉、巴旦杏などが其邊に茂つて居まして、木戸の横手にある石垣の隅には見上げるほど高い枳殻が立つて居ました。あの棘の出た幹の上の方に、ある日私は大きな黒い毛蟲の蝶を見つけた。田舎で荒く育つた私の眼にも、その蝶ばかりは薄氣味の悪いほど大きかつた。そして青々しい黒い翅を震はせて居ました。私は小石を拾つて投げつけようとしたが、恐しくなつて、そのまゝ母屋の方へ逃げて歸つたことが有りました。斯の手紙を書きかけて置いて、私は兄弟の子供を連れながら河岸の方まで歩きに行つて來ました。禰神社の境内まで行くと、兄の方はぶい腹を立て、家の方へ歸つて了ひましたか

ら、私は弟の方だけ連れて、河岸へ出ました。船宿などのごちや／＼並んで居るところです。投網も乾してあります。そこで私は小船を借り一人の子供を乗せて水の上を滑ぎ廻つたこともありま。河岸へ行く度に、子供はそれを言出して復た船に乗りたいたと強請りましたが、今日は止さして、一緒に柳並木の下を歩きました。ふと私は十二三ばかりの獅子を冠つた男の兒が本町の方へ歸つて行くのに出逢ひました。

『おい、そこんところで一つ遣つて見て呉れないか。』

私は呼び留めまして、袂から二錢銅貨を二つ取出して渡しました。

『御覽、角兵衛だよ。』

と小聲で言つて聞かせますと、子供も石の欄に倚凭つて眺めました。

人通りの少ない静かな柳のかけで、雪袴のやうなものを穿いた少年が柔軟な身體を種々に動かして見せた。兩足で首を挟む、逆に蜷蜷返りする、自由自在にやりました。少年は細い瘦せた、曲藝の爲に成長れないやうな身體をして居ました。

『お錢を持ちながら造るのかい。そこに置いた

「可いぢやないか。私が見てるから大丈夫だ。」

と私が言ふと、少年はそれも左様だといふ顔で笑つて、手に一ぱい握り締めて居た銅貨を柳の根元のところに置いて復た一つ二つ藁を遣りました。身體の中心を兩手だけで支へて、土の上を動き廻りなぞして見せました。

斯ういふ少年に縁がせて川渡りするらしい日に焼けた女がそこへ通りかゝりました。間もなく少年は掌の土を拂ひ、赤い布で頭の上の小さな獅子を包んで、その女の後を追ひました。「兄さんも来れば可いのにお獅子が見られるのに。」

「ね、角兵衛見たつて、左様言つてやりませう。」

私は弟の方の手を引いて歸りました。家の門口まで行くと、兄の方が飛んで来て、獅子を見せたかつた不平を頻りに並べました。弟は又身振手眞似をして兄を羨ましがらせました。

「あ、好いなあ。」

「来れば可いぢやないか。」

「何故兄さんは一緒に行かなかつたの。お獅子が見られたのに。」

「父さん、そのかはり蜜豆買つて——」

「蜜豆なんか止せ。」

私は子供を連れて家へ入り、茨城の方から貰つたばかりの粽を分けて呉れました。青い柔かな笹の葉で面白く包んであつて、後粽の三角なのとも異り、私の故郷の方で造るのとも違ひました。子供の甘さうに食つて居る傍で、私はその笹の葉を笹のやうに鳴らして聞かれました。

今笑つて居る、直に復たぐり出す、一度泣出したら地團太踏むやら姉さん達に揺附くやら、容易には納まらいのが弟の方の子供です。何故子供といふものは、もつと自然に育てられないのかしら——何故斯う威かしたり欺したり時には残酷な目にまで逢はせなければ育てられないのかしら——私は時々そんなことを思ひます。頭の一つもブン擲らずに済ませるものなら、成るべく私はそんな眞似もしたくない。

左様思つて控へて居りますと、「貴女がたの父さんは御砂糖だと思へますね」などと人々には笑はれる。終には世話するものまで泣いて了ふ。見るに見兼ねて、何時でも私がそこへ出なければ成らないやうなことに成ります。どうかすると私は憤怒の情に驅られて、子供を叱責する前に、激しく自分の唇を噛むことも有ります。憐むべき Domestic Animal……なにしろ弟の方の子供は丁度今が荒々しい、手に了へない盛りですから……

どれ、私の生れた家の方へ貴女の想像を誘つて行つて、舊い屋敷をお目に掛けませう。母がよく腰掛けた機のおいてある板の間は、一方は爐邊へ続き、一方は父の書院の方へ續くやうに成つて居ました。斯の板の間に續いて、細長い廂風の座敷がありまして、それで三間ばかり廣い部屋をぐるりと取圍くやうに出来て居りました。斯の部屋々々は以前本陣と言つた頃に役に立つたので、私の覺えてからは、奥の部屋などは特別の客でもある時より外は使はない位でした。別に上段の間といふのが有りました。そこは一段高く設けた奥深い部屋で、白い縁の畳などが敷いてあり、昔大名の衰泊りしたところとかで、私が子供の時分には唯床の間に古い鏡や掛物が掛けてあるばかりでした。父はそこを神殿のやうにして、毎朝神様を拜みましたから、私も眼が覺めると母に連れられて御辭儀に行つたものです。それほど父は厳格な、神信心な人でした。髪なども長くして、そ

れを紫の紐で束ねて、後の方へ垂れて居ました。上段の間を隔て、寛ぎの間といふのも有つて、そこが兄の居間に成つて居りました。村の旦那衆はよくそこへ話に集りました。仲の間は明るい光線の射し込む部屋で、母や嫂が針仕事をひろげたところでした。障子を明けると、細長い坪庭を隔て、石垣の下に叔母の家の板屋根などが見え、ずつと向うの方には遠い山々、展けた谷、見渡むやうな廣々とした平野までも望みました。丁度私の田舎は高い山の端で、一段づつ石垣を築いて、その上に村落を造つたやうな位置にあります。私の家はその中央にありました。叔母の家といふはお霜婆といふ女に貸してありましたが、心易く私の家へ出入りした人でした。そこから通つて来るには是非とも坂道の往來を上らなければなりませんでした。

お霜婆はてかくした禿を薄い髪の毛で隠して居るやうな女でした。若い女中を一人使つて、女ばかりで暮して居りました。どうして斯様な人が叔母の家を借りて居たのか、皆目私には解りませんでしたが、兎に角村の旦那衆がよく集るところではありました。お霜婆は私を可

愛がつて呉れましたから、私も遊びに行き行きしまして、半ば自分の家のやうに心易く思つた位でした。旅の館屋が唐人館などを吹いて通ると、必とそれと呼んで、棒の先にしやぶるやうにした水飴を私に買つて呉れたのも、斯の婆さんでした。しかしお霜婆の可愛がりやうは、太助やお牧などと違つて、どこか煩いやうなところが有りました。どうして、なか／＼お世辭ものでした。

斯のお霜婆に就いて、私は片意地な性質を顯はしました。お霜婆の家でも毎半蠶を飼ひましたが、ある時私は婆さんの大切に居る蠶に煙草の脂を背めさせました。斯の惡戯は非常に婆さんを怒らせました。その時から私は婆さんと仲違ひして、婆さんの家の前は除けて通り、婆さんが家へ来て言葉を掛ける時でも私は口を利かなく成つて了ひました。子供ながらに私はそれを六十日の餘も續けました。

そのうちに村の祭が來ました。私は銀ざんとお揃ひで黒い半被を造つて貰ひました。背中

に家の紋を白く見せたものでした。火の用心の腰巾着もがら下げました。角祭の支度が出来た、仲直りがてらお霜婆に見せて來るが好からう、と兄が言つて、嫌がる私を無理やりに背中に乗せ婆さんの家へ昇き込みました。兄に置いて行かれた後で、婆さんが何と言つても私は開入れませんでした。私は足をばた／＼させて泣きました。婆さんも手の著けやうが無いといふ風で、一層腹を立てまして、復た私を無理やりに背中に乗せ、家の方へ送り返しに來ました。

斯様な風で、容易に私の心は解けませんでしたが、お霜婆の方から私の好きな羊羹を持つて仲直りに來ました。其時私は裏の井戸のところ立つてお牧が水を汲むのを見て居りましたが、お霜婆の仲直りに來たことを聞いて、お牧に隨いて厩屋の方へ行きました。斯の婆さんと以前のやうに口を利くやうに成る迄には、大分私には骨が折れました。

四

『もし／＼龜よ、龜さんよ、世界のうちにお前ほど、歩みの遅鈍いものは無い——』

邪氣な唱歌が私の周圍に起りました。私は二人の子供を側へ呼びまして、

『さあ、お前達は二人とも爺だよ。父さんが兎に成るから。』

『父さんが兎？』と兄の子供は念を押すやうに私の顔を覗き込みました。

『ああ、爺と兎と馳けくらべしよう。いゝかい、お前達は爺だから、そこいらを歩いて居なぐちやいけない。』

お伽話の世界の方へ直に子供等は入つて行きました。二人とも趣にでも成つた氣で、揃つて手を振りながら部屋の内を歩き廻りました。『爺さんはもう出掛けたか。どうせ晩まで掛るだらう……』

と私は子供等に聞えるやうに言つて、『こちらで一寸一眠りやるか……』

私が横に成つて、ぐうぐう軒をかく眞似をする、子供等は驚喜したやうに笑ひ乍ら、私の周囲を廻つて居りました。そのうちに、私は半ば身を起して、大欠伸したり兩手を延ばしたりして、眠から覺めたやうに四海を見廻しました。

『や、これは寝過ぎた……』

と私が失策つたやうに言へば、子供等は眼を圓くして、急いで床の間の隅に隠れました。私

は龜の在所を尋ね顔に、わざ／＼簞笥の方へ行つて見たり、長火鉢の側を廻つたりしました。

『兎さん、こゝよ。』

と子供等が手を打つのを、私は聞えない振をして、幾廻りか廻りながら漸くのことゝ龜の隠れて居るところへ行きました。其時、子供等は勝誇つたやうな聲を揚げて、喜び騒ぎました。

どうかすると私は斯様な串談をして、子供は相手に遊び戯れます。斯ういふ私を生んだ父を、余様な人であつたかと言へば、それは嚴格で、父の膝などに乗せられたといふ覺えの無い位の人でした。父は家族のものに對して絶対の主權者で、私等に對しては又熱心な教育者でした。私は父の書いた「三字經」を習ひ、村の學校へ通ふやうに成つてからは、「大學」や「論語」の素讀を父から受けました。あの後藤點の栗色の表紙の本を抱いて、おづ／＼と父の前に出たものです。

父の書院は表庭の隅に面して、古い枝ぶりの好い松の樹が直ぐ障子の外に見られるやうな部屋でした。赤い毛氈を掛けた机の上には何時でも父の好きな書籍が載せてありましたが、時には和算の道具などの置いてあるのを見かけたことも有ります。父はよく肩が凝ると言ふ方ですが、銀さんと私が叩かせられたものですが、肩一つ叩くにも只は叩かせませんでした。歴代の年號などを誦讀させました。終には銀さんも私も逃げてばかり居たものですから、金米糖を褒美に呉れるから叩けとか、按摩賃を五圓づつ遣のから頼むとか言ひました。

『享保、元祿……』

私達は父の肩につかまつて、御經でもあけるやうに誦讀しました。

何ぞといふと父が私達に話して聞かせることは、人倫五常の道でした。私は子供心にも父を敬ひ、畏れました。しかし父の側に居るとは窄屈で堪りませんでした。それに父が持病の疳でも起る時には、夜眠られなと言つて、紙を展げて、遅くまで獨りで物を書きました。その蠟燭を持たせられるのが私でしたが、私は唯眠くて成りませんでした。

斯うした嚴格な父の書院を離れて、何の間の方へ行きますと、そこに母や、嫂が針仕事をひろげて居ります。私は武者繪の數寫などして、勝手に時を流りました。母達の側には別に小机が置いてあつて、隣の家の娘がそこで

手習ひをしました。お文さんと言つて、私と同
年で、父から讀書を受ける爲に毎日通つて來た
のです。父を「お師匠様」と呼んだのは斯の娘
ばかりでなく、村中の重立つた家の子はあらか
た父の弟子でした。中には隣村から通つて來る
ものも有りました。

私は今、町の湯から歸つて、斯の手紙のつゞ
きを貴女に書いて居ります。八歳ばかりに成る
近所の女の兄が二人來て、軍艦や電車の形を餘
念なく描いて居る私の子供の側で、「あねさま」
などを出して遊んで居ります。そゝさまを眺め
ると、私が隣の家の娘と遊んだのは丁度そ
んな幼少い年頃であつたことを思ひ出します。

お文さんの許は極く懇意で、私の家とは互
に近く往來しました。風呂でも立つと言へば、
互に提灯つけて通ふほどの間柄でした。相接
した裏木戸傳ひに、隣の裏庭へ出ると、そこは
暗い酒蔵の前で、大きな造酒の樽の影には男達
が出入して働いて居たのです。新酒の造ら
れる頃、私は銀さんと一緒によく重箱を持つ
て、「ウムシ」を分けて貰ひに通ひました。この
隣の「ウムシ」それから吾家で太助が造る幾米な
どは、私が少年の頃の好物でした。私は又お

文さんと一緒に、庭の美濃柿の熟したのを母か
ら分けて貰ひ、それに麥香煎を添へ、玄關のと
ころに腰掛けて食ふのを樂みとしました。

貴女は「オバコ」といふ草などを採つて遊んだ
ことが有りますか。お文さんはあの葉の纖維に
絲を通して、機を織る子供らしい眞似をしたも
のです。私が裏の稻荷側の巴旦杏の樹などに
上つて居ると、お文さんはその下へ來てあの葉
を探しに草叢の間を歩き廻りました。斑鳩が
來て鋭い聲で鳴いた竹藪の横は、私達がよく遊
び廻つた場所です。そこで假の實を集めるば
かりでなく、時には樞鳥の落して行つた青い斑
の入つた羽を拾ひました。

私が祖母と二人で毎晩泊りに行く隠居所に
對ひ合つて、土蔵がありました。暗い金戸の
閉つた石段の上は、母が器物を取出しに行つて、
鏡前をがちゃ／＼言はせたところです。私は
母に連れられて、土蔵の二階に昇り、父の蔵書
を見たこともありま。古い本箱が幾つもく
積み重ねてありました。斯の土蔵の下には年を
とつた柔和な蛇が住んで居ました。太助などは
「主」だと言つて、誰にも手を著けさせずに大事
にして置きました。その「主」が頭を出して晝寝

をして居る白壁の間、土蔵の前にある柿の樹の
下あたりは、矢張私達の遊び場所でした。甘
い香のする柿の花が咲くから、青い幕の附いた
望な實が落ちるまで、私達少年の心は何を見
ても退屈しませんでした。

お牧は井戸から水を擔いで土蔵について石段
を上つて來ます。斯の柿の樹のあるところから、
更に石段を上つて母屋の勝手口へ行くまでが、
彼女の水汲に通ふ路でした。その邊は薄本陣時
代の屋敷跡といふことでしたが、私の覺えた頃
は既に桑畠で、林檎や桐などが畠の間に植ゑ
てありました。隣の石垣の上には高い壁が日に
映つて見えました。それがお文さんの家です
た。

私達が子供の時分には、妙に暗い世界が横た
はつて居りました。多勢村のものが寄集まつて
一人の眼隠した男を取圍いて居る光景を一
寸想像して見て下さい。激昂した衆人の祈禱の
中で、その男の手にした幣帛が次第に震へて
來ることを想像して見て下さい。其時は早やあ
る狐の乗移つたといふ時で、非常に權威あり
げな聲で、神の御旨といふものを傳へます。ど
うかすると斯の狐の乗移つた人は遠い森を指

して飛び走つて行くことも有りました。私は又、村の小學校で、狐のついたといふ生徒の一人を目撃しました。その少年は顔色も變り手足を震はして居ました……

斯ういふ不思議なことが別に怪まれずにあるやうな、迷信の深い空氣の中で、私は子供の時を送つたのです。何等かの自然の現象で一寸解釋のつきかねるやうなことは、知らない生物の世界の方へそれを押しつけてありました。山には狼の語が残し、畠には猪や狸が顯はれ、暗くなれば夜鷹だの狐だのの鳴聲のするが私の故郷でした。それほど私達の幼少い時の生活は禽獸の世界と接近したものでした。蜂の種類も多くありました。殊に地蜂と言つて、五層も六層も土の中に巢を造るの、土地で賞美される食料の一つでした。兄達は蛙を捉へて來て、その皮を剥ぎ、逆さに棒に差し、地蜂の親の餌を探しに來るのを待受けたものです。蛙の肉に附けて置いた紙の片で、それを咬へて飛んで行く蜂の行方を眺めると、巢の在所が知れました。小鳥の種類も豊富なことも故郷の山林の特色です。鶉や鶉で捕れる鶉、鶉の類はおびたしい數でした。雀などは小鳥

の部にも數へられないほどです。子供ですら馬の尻尾の毛で雀の雛を造ることを知つて居ました。

私は、同じ年頃の子供ばかりで遊ぶ時には、まだそれほど遠く行きませんでした。でも裏の田圃道に出て、高い樹木の上の方に小鳥の囀るのを聞くのは樂みでした。田圃側には「スイコギ」の葉を垂れたのが有りました。それを探つて、鹽もつけずに食ひました。村の學校のあつた小山の下のところには細い谷川が流れて居ます。そこへ私はお牧から借りた笊を持つて行つて鰻をすくつたことも有ります。お文さんも胸まくり、裾からげて、子供らしい淡紅色の腰巻まで出して、石の間に隠れて居る鰻を迫ひました。

何時の間にか私は斯の隣の家の娘と二人ぎり隠れるやうな場所を探さやうに成りました。私達は桑島の間にある林檎の樹の下を歩き又は玄關から細長い扇風の小座敷を通り抜けて、上段の間の横手に坪庭の梨の見えるところへ行きました。すると桶りで、若い娘が私達を探しに來ました。

お牧、お綱婆、斯の手紙には私は主に少年の眼に映じた婦人のことを貴女に書く積りですから、その順序として幼少い隣の家の娘のことを御話するので。有體に言へば、私は女といふものに初めて子供らしい情熱を感じました。私はお文さんを堅く抱締めたこともありま

ある日、私はお文さんに誘はれて隣の家に遊びに行きました。酒屋の香氣のする庭を通り抜けて、蔵造りになつた二階の部屋へ上つて見ました。隣とはよく往來をしましたが、そんな奥の方まで連れられて行つたのは私には初めてです。丁度こへお文さんの兄さんの道さんがやつて來ました。道さんはお文さんや私より二ツ三ツ年長の少年で、村の學校でも評判な好く出来る生徒でした。

其日まで私は夢中でお文さんと遊んで居て、第三者といふものの有ることを知りませんでした。お文さんの部屋で、道さんと一緒に成つて見て、それが解つて來ました。私は唯道さんに見られたといふだけで、何となく少年らしい羞

恥を感じました。それきり私はお文さんを離れて、今度は道さんだの、それから他の男の兒と遊ぶやうに成りました。

お文さんは相變らず吾家へ手習に通ひました。しかし私が道さん達の仲間入をするやうに成つてからは、以前のやうに彼女と親しくしませんでした。

御承知の通り、狭い田舎では大抵の家が遠い親類の形に成つて居ます。左様いふ家の一つに、丁度お文さんと同年ぐらゐるな娘がありました。たゞ惡戯好きで学校の朋輩は、その娘の名と私の名とを並べて書いて見たり、課業を終つて思ひ思ひに歸つて行く頃には、杉の樹のあるお寺の坂の上あたりから、大きな聲で呼ばつたりしたものです。

それを聞くと私は、
『養を喰へ。』

といふ風で、吾家を指して歸りました。

それから九歳の秋に東京へ遊學に出掛けるまで、私の好きなことは山家の子供らしい荒くれた遊びでした。次第に私は遠く行くやうに成つて、男の友達と一緒に深い澤の方まで虎杖の莖などを折りに行き、「カルサン」といふ勞

働の袴を著けた太助の後に隨いて、松蔭の切作してある寂しい山林の中を歩き廻り、路傍に、酸い葉一でも見つけると、それを生でむしゃくし食ひました。太助とは、山の神の祠のあるところへ餅を供へにも行つたことが有ります。都會の子供などと違ひ、玩具も左様自由に手に入りません。私は袴と半紙で「するめ紙鳶」を手造りにすることを覺えました。それを村はづれの岡の上へ持つて行つて、他の子供と競争で揚げました。「ジョクノ」——東京の言葉でいふ「ネツキ」は、最も私の心を樂ませた遊びです。木は不自由しない村ですから、私は太助の鈍序に、強さうな木の尖端を鋭く削つて貰ひました。

どうかすると箱根れた田圃側には、多勢村の少年が群がつて「斯のジョクノ」を土の中に打込んで遊びました。私の父はやかましいので、斯ういふ遊びに勝つても、表から公然と擔ぎ込む譯に行きません。左様いふ時に、都合の好いのはお霜婆の家でした。

銀さんと私がいよく上京と定まつた頃は、母の織る機がいそがしうに響きました。母は私の爲にヨソイキの角帯を織りました。なししろ私はまだ田舎の小學校で僅か學んだば

かりで、小さな旅の鞆に金米糖を入れて呉れるからと言はれて、それを樂みに遊學の日を待つほどの少年でした。

五

旦那様はじめ、お子様がた御變りもなき山、殊に此節は幼い二人を相手に楽しい日を送つて居らるゝとか。先頃子供の許へ贈つて下すつた御地の青い林檎は斯のあたりの店頭にあるものと異なり樹から摘み取つたばかりのやうな新鮮を味ひました。御蔭で子供も次第に成身して参ります。函館の老翁上京の節も、孫達の顔を眺めて、稀に出て來て見ると大した違ひだと申した位です。私がたはむれに弟の方の子供を抱き上げて見て、更に兄の方を抱き上げたがら大分重くなつたと申しましたら、兄の子供はさも嬉しさうに首をすくめて笑ひました。

『重くなつたと言はれるのが、そんなに嬉しいの？』

と側に居る娘も笑ひながら言ひました。毎日長い綱竿を持つて町の空へ來る蜻蛉を追ひ廻して居た兄の子供も、復た復た夏休み前と同じやうに鞆を肩に掛けて、學校へ通ふやうに